
R18
ADULT ONLY
えっちルーム
虹に導かれた少女達
【前編】えっちルーム編
第1・2・3話
春野しずく

キャラクター紹介



りお

マロン色のロングヘアで、
スタイル良しの美人。明るく、
勇気があって仲間思い。いつも
エッチなことに興味津々。



ゆい

ポニーテールがトレードマークの、
落ち着いた佇まい。頭脳明晰の
読書家。くすぐりが大好きだが、
くすぐられるのも弱い。



はるか

りおとゆいよりも年下。
リボン付きのショートカットで、
パンツはいつも白。三人の中で
一番エッチだが恥ずかしがり屋。

第1話　虹の輪とえっちルーム

『オープニング』

私達は、なぜこの世界に生まれて、子孫を残しながら何百年も何千年も生きているのか。なぜ、生きていると、肌が呼吸をして、人の肌に触れたくなるのか。なぜ、体に触れ、触れてもらうと、こんなにも気持ちよくて、幸せな気持ちになるのか。私は、その答えをずっと知りたいと思っていました。

5年前、私が未知の空間で灰色の深淵に飲み込まれそうになった時、友が、体を投げ打って私を救い出してくれました。私はその時、ようやく答えに辿り着きました。――「肉体と魂を救済し得るのは、他者の肉体という『実在』のみである」――と。

『肉体と魂の救済 ――生命接触の現象学的考察――』

（第二章：性的交渉による魂の再構成、二六五頁より抜粋）

〈聖歴三五五五年刊行〉

アルコバレーノ大学 生命倫理学教授

ハミン・P・ゆい 著

◆

〈5年前〉聖歴三五五〇年

「これで良し」

ぎゅっと土を人差し指で奥に押し込み、星の砂を振り分けるように周囲の土をまぶす。私は手のひらで地面を撫で、「元気に育って芽を出すんだよ」と声をかけた。

思ったよりセーラー服に土が付いちゃった。明日洗濯しなきゃな。まだ昼過ぎだから、空は甘いオレンジ色の予感を漂わせつつ、目が眩みそうなほどに明るい。

横の小屋に余った肥料と牧草をどさっと置き、蛇口から水を出して手を洗う。茶色い土が爪の間からポロポロ流れ落ちていく。私は持ってきた水筒とタオルを手に持ち、あぜ道を戻り始めた。

この島に引っ越してきてもう三年。広大で、自然豊かで、住み心地の良いマンションがあって、その隣には牧場と公園がある。そして、仲良しの女の子の親友も二人。市街地や港まではちょっと距離があるけど、不自由など何一つない。

「あ、庭にシャベル置きっぱなしにしてなかったかな」

マンションに着いて階段を登ろうとした時、ふと思い出した。共用の広い庭に出て、ベンチがある方の奥に進み、身をかがめて隅々の方まで

見た。朝忘れた気もしたけど、どうやらちゃんと片付けてから畑に出かけていたみたいだ。

この後、親友のゆいちゃんとはるかちゃんと公園で約束がある。スカートだけ履き替えたらすぐに行こう。

……ピシッ

「？……気のせいかな」

泡がはじけるような音が聞こえた気がする。炭酸ジュースをコップに入れた時のような感じもしたが、聞いたことのないような独特な音だ。

部屋に戻る裏口側の階段の、さらに奥にあるベンチ二つ。ここは夜になると、月の光が当たって夜風が涼しく気持ちいい場所だ。雑草はきれいに刈り取られていて手入れがされている。

「なにかな……。外はまだ明るいんだけど、ベンチの向こう側で、何か

光ってる……？」

草の匂いを吸い込んだ風が、二の腕に当たる。肌の表面から奥まで、くすぐったく疼くような予感がする。一歩、二歩、三歩と忍ぶように歩くと、靴と草の擦れるさえずりが聞こえる。ベンチの先はもう、私の背丈より大きい植込みの木と、肌色の外壁だ。

「わ、虹だ。虹の輪が光ってる！」

思わず口を開けすぎて、アゴが外れるかと思った。赤、オレンジ、黄色、緑、青、紫……遊び用のフラフープ、いや、マンションの部屋のドアほどの大きさがある。時折炭酸ジュースのような音を発して、ひっそりと、目を閉じて佇むように光っている。

「すごい……これ、なんだろう。こんな虹の輪がこのマンションにあったの？　初めて見た……」

空の空気、太陽の光とは違う……不思議な熱を感じる。肌を刺激して、

体の奥の芯に響くような熱。そして、霧のような白い気体が、鼻先を通り過ぎていく。

「輪の真ん中が白い霧みたいだ。どうなってるんだろ。なんか、違う世界に繋がっているみたい」

（……）

まだ、ゆいちゃんとはるかちゃんとの待ち合わせまで、時間はある。

肌に伝わる熱、心地よい霧の感触、柔肌とセーラー服を照らす、魔法のような虹の光。私の手の平は吸い付くように前を向き、虹の光を受けて七色に反射している。もう、目の前三十センチ。

ピシッ……ビシビシビシ！……

「うわっ！　びっくりした、急に光って」

一瞬の無重力、ジェットコースターで瞬間移動したかのように、私の

体は浮き、尻餅をついた。黒の短いスカート、お尻に土は付いていない。

床は柔らかいタイルのようで、痛くもなんともない。すぐ後ろは、今通ってきた虹の輪。前……目の前……。

「えっ……」

私達が住む五階建てのマンションよりずっと大きい、茶色の建物だ。

建物の上に古めかしい木の看板が付いている。

「……え？……え……えっち、ルーム？……えっちルーム!?」

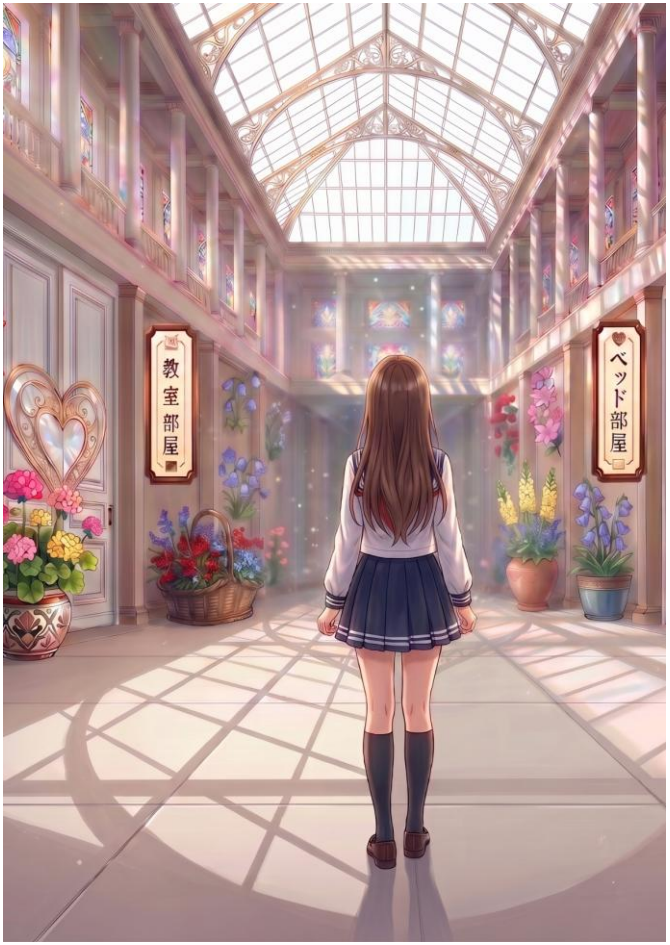
（えっちルームって書いてある。えっちルームって……つまり、エッチなことする部屋ってこと？　うわわわ、何だか急に恥ずかしくなっちゃうっていうか、体が火照ってきちゃいそう。入っていいのかな……）

キイ……。

「うわあ……きれい」

目と耳が、羽ばたくように開かれた感覚がする。広い空間、まっすぐ続く廊下に、クリーム色の絨毯が敷かれている。天井は陽射しが降り注いでいるように明るく、壁には色とりどりの花が飾られ、中はほんのりあたたかくていい匂いがする。

私はドキドキしながら、一歩、また一歩と中に進んでいった。廊下の左右に二つずつ、計四つ大きなドアが見える。入り口すぐ横にも小さな



木のドアがあるけど、メインの部屋はあの四つみたいだ。

絨毯を踏み込む感触が柔らかくて、足取りが自然に軽くなる。

私は左の手前のドアの前まで来た。

「何て書いてあるかな……。え、教室部屋？　教室って、あの教室？」

建物がえっちルームで、教室部屋……さらに胸のドキドキが、鼓動が高まってきた気がする。そして思わず、ドアを開けて入ってしまった。

「あ、新しい子だー」

「りおちゃんっていうんだ。こっちにおいでよ。一緒におしゃべりしようよ」

うわわわわ、本当に教室だ。学校みたいな教室そのまんまだ。どうなってんのこれ？　結構広くて、十五人位かな、かわいい女の子がいる。みんな私と同じ位の歳か、もうちょっと若そうな子もいる。

（うぐっ……これって）

思わず生唾飲み込んでしまった。

椅子に座っておしゃべりしている子もいれば、本を読んでいる子もいれば、数人で立って、おっぱい触り合ったりしている子もいる。その他にも……。

あれっ？……名前がわかる。みんな初対面のはずなのに、ここにいる子達の名前が自然にわかる。不思議だ。

「りおちゃん、よろしくね」

「あ……どうして私の名前がわかるの？」

「ふふ、そう思うよね。ここは異空間だから色々不思議な力がはたらくみたいよ」

前にいる二人の子は、めぐみちゃんとあおいちゃんっていうみたい。二人共、ゆいちゃんがよく着てるブレザーみたいな制服だ。そしてなんというか、愛嬌があってかわいい。

「あの……めぐみちゃん、私不思議な虹の輪をくぐったらここに来ちゃ

ったんだけど、ここはどういう場所なの？　まさか、変な空間に飛ばされてて帰れなくなったりとかしないかな……」

「それは大丈夫だよ。入り口前の虹の輪をくぐれば、すぐ元の場所に帰れるから」

「ホッ」

ひと安心。

めぐみちゃんが私の手を取って、ニコニコして話しだす。

「ここのみんな、そうやって虹の輪から来たんだよ。私もつい最近来たばかりだから詳しくはわからないけど、虹の輪は世界中にたくさんあって、限られたエッチな女の子だけがここに辿り着けるんだって！」

「え、え、え……エッチーー!?」

いけない、思わず興奮して大きな声が出てしまった。

ニッコリ笑うめぐみちゃん。握られてる手が……うぐ……少し熱くなって汗をかいてきたような……。

そう、私、実はすごくエッチで……同じマンションに住む親友のゆいちゃんとはるかちゃんと、おっぱい触りっこしたり、スカートめくりしたり、腋こちょこちょってくすぐったり、エッチなことばっかりしている。そんな年頃とはいえ、自分でも充分自覚しているのだ。「エッチ」と言われても、何も反論できない。

いやしかし、だからといって、エッチだから……エッチだから虹の輪に辿り着いて『えっちルーム』に来た……。心の中を覗き見されて導かれたようで、顔から火が出そうだ！

「ふふ、りおちゃんって、スタイルいいし、おっぱいも結構弾力ありそうだよね」

めぐみちゃんの隣にいるあおいちゃんが、子猫のように無邪気に笑って、私の胸元を見ている。ドキリとした瞬間、夏用薄手のセーラー服の右胸を、あおいちゃんの手の平が撫でてきた。

「あん、もう！」

「あはは、りおちゃんかわいい～。おっぱい柔らかいね」

あおいちゃんの手は、優しくて温かかった。体の奥に、染み渡るような虹色の清涼感が届いた気がする。このえっちルームの建物ぜんぶ、そして今いる教室部屋も、温かさや優しさや安心感が、深く細胞ごと包み込むように息づいている感じがする。

そして、甘く体を刺激するような、エッチな雰囲気……。

あおいちゃんの、チェック柄の短いスカートと眩しい太ももが目に飛び込んでくる。たった今、触られた胸が疼く。ニコニコしているあおいちゃん。遠目で教室を見渡すと、軽やかな歓声と共にスカートの中身がちらりと見えた。四人ほどの女の子の、スカートのめくりあい……。

私は、全身が活気づいている。頭の中で、何かが弾けた。

バサッ！

「きゃあ〜！」

あおいちゃんのパンツ、かわいい白のパンツ、すらっと伸びたきれいな太もも。

「もう、りおちゃんのエッチ！　いきなりなんだから」

あおいちゃんはチェック柄のスカートを押さえ、顔を赤くして照れている。

（あ……思わず……いつもゆいちゃんとはるかちゃんにしてること、スカートめくりしちゃった！　でもあおいちゃん……か、か、かわいい〜）

「ねえりおちゃんさ……実はかなりエッチでしょ？　なんか、今のめくり方でわかった感じがする」

ニヤニヤしてあおいちゃんが顔を近づけてくる。女の子特有の、花と汗を混ぜたようないい香りが……。

「あはは、いや……私も同じマンションに住む友達と、しょっちゅうこんなことやってて……はは、恥ずかしい」

「やっぱり～。そんな気がしてたよ」

あおいちゃんが笑って、私のほっぺたをちょんちょんとつつく。めぐみちゃんが後ろから背中をさわさわしてくると、私はめぐみちゃんの二の腕をちょんちょんとつつく。

和気あいあい、明るい女の子達の声、自然とこぼれる笑顔、ひらひら舞うスカート。私も自然と笑みがこぼれ、頬が緩んできてしまう。

（ここってどんな場所……？　現実とは違う場所なのは確かだ。なんか……心がポカポカして……気分が高まってきちゃう……）

「りおちゃんのセーラー服のスカート、結構短いよね？」

めぐみちゃんが、少しだけ意地悪そうな笑みを浮かべて、私のスカートに手を伸ばそうとしている。

しかし……。

（めぐみちゃんもかわいいし、スカートも私と同じ位短い。そうはいかないもんね！）

「きゃあ～～～もう！」

めぐみちゃんより、私の手の方が早かった。すらりと伸びた生足と、ピンク色の下着が丸見えになる。

「えへへ、ピンクのパンツ見ちゃっ……」

「うきゃあああーーー！」

「りおちゃんも丸見え！」

み、み、見られた！　スカートめくられて、パンツ……私も今日はピンク。しかも星模様のフリル付き。

は、恥ずかしいけど……なんか体の奥がじわじわしてくる。そして、さっきよりも、もっともっと心がポカポカしてきて、あふれんばかりの

力が満たされてくる。

（あの子、ひと際美人だな……。すらっと背が高くて、モデルさんみたい）

騒がしい教室部屋。女の子達は、自由に闊歩して思い思いに過ごしている。しばしめぐみちゃんとあおいちゃんとじゃれ合っているうち、一際目を引く女の子が、視界に強く飛び込んできた。教室の真ん中あたり。さらさらのストレートのロングヘア、私と同じセーラー服で、紺色のスカートだ。名前は、せいかちゃんっていうみたい。

（……せいかちゃん、どんなパンツ履いてるんだろ）

（……スカートめくりしたい……めくっちゃおうかな……）

私は、そっとせいかちゃんに近づいた。せいかちゃん、背が高いな。たぶん私より高い。他の子とおしゃべりしてて、私が背後に忍び寄ってることに、全然気づいてない。

足音を立てないようにそうっと近づいて、せいかちゃんのスカートに手を伸ばす……。

ぴらっっ！

――!?

「きゃあああああ～～～～～ !!」

わわわ……今、丸見え……。パ、パンツ履いてない！　すべすべ肌色のきれいなお尻。せいかちゃんの小鳥のような悲鳴が教室中に響き渡る。

周りの子達、興奮してざわざわしてる。

せいかちゃん、少し涙目で、ほっぺがピンクに紅潮して……私に近づいてきた。

「りおちゃん……エッチ！　初めて会うけどさ、相当エッチでしょ？」

「え、へへ、やっぱりわかる？」

（私ここに来たばっかりなのに、見透かされてるのかな）

「パンツ履いてないのバレちゃって、すっごい恥ずかしかったんだからね！　だから……」

せいかちゃん、私を壁際に追い込んで、顔を近づけてくる。ニコニコして、私の目をじっと見つめて、人差し指で軽く甘噛みするように私のおっぱいを触ってくる。

「あ、もう、ちょっと……」

「実は私もさ、かなりエッチなんだよ」

……さわさわさわ……さわさわさわ……

あ……せいかちゃんに、スカートの中に手入れられちゃった。あったかい指が、太ももを、お尻を、真ん中の足の付け根を……柔らかく包み込むように撫でてくる。

（う……うわ……ど、ど、どうしよう……す、すっごくエッチなことされてきちゃ……あ、耳に息がふうって……こ、声が出ちゃいそう……！）

……さわさわ……さわさわ……こしゅこしゅ、くしゅくしゅ……

「あん……ちょっとそこ……」

せいかちゃんがニヤニヤしてる。

「なあに～りおちゃん、うふふふ、今どこ触られてるのかなあ～」

「う……んぐ……あふ……！」

せいかちゃんの首元から漂ういい香り、澄んだ目でじっと見られて、せいかちゃんの……ゆ、ゆびが……パンツの真ん中の、一番敏感なスジの所に……

……くしゅくしゅくしゅ、こしゅこしゅこしゅ……

「あっ！」

「りおちゃん……パンツ、濡れてるよ」

「あん……だって……あふ……あっ！……」

指と布がこすれる音が聞こえる。

こすれる度に、下半身がどんどん熱くなって、一番敏感な所が「ぴくん、ぴくん」って震えるように気持ちよくなってきて……あ！……パンツの中に指、入れられちゃった！

……くしゅり……くちゅくちゅくちゅ……くちゅくちゅくちゅ……

……くしゅり……くちゅくちゅくちゅ……くちゅくちゅくちゅ……

「あっ！……あん……はあ……はあ……気持ちいい……」

「りおちゃん、パンツびしょびしょだよ」

「あん……えっち……そ、そんな……恥ずかしいこと言わないで！」

気持ちよくて、足がガクガクする。膣口からいっぱい、エッチなお汁

があふれてくる。せいかちゃんにピンクのお豆のところ触られるたびに、あ、また愛液が出てきちゃって……

……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……

「ねえ……ちょっと……私このままじゃ……あ、あ……ああん！……」

ニヤニヤ見てくるせいかちゃんの視線が恥ずかしい……ぎゅっと左手でせいかちゃんの腕を掴んじゃって……あ、ちょっと、その真ん中の所そんなにこねられちゃうと……！

……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……

「りおちゃん、かわいい。りおちゃん、エッチだね」

「あ、ダメ……イッちゃう……あ……う……んああ！　あ……あああ～～～!!」

……くちゅん……ガクッ……

――頭の中まっしろだ……きもちいい……ボーッとしちゃう……あ、何か光って――

「ねえ、りおちゃん全然来ないよ」

「本当、おかしいね。普段約束破ったり絶対しないのに」

舗装道路を一本挟んだ、マンションの隣の小さな公園。

赤紫色のきれいな花びらを誇らしげに広げている花を見つめるゆい。ブランコに座りながら、足をパタパタさせているはるか。他に公園を歩いているのは、エサを運ぶアリと、草花でジャンプ運動をしているバッタだけ。りおの足音が全く聞こえないまま、二十分が過ぎていた。

「ちょっとおうちまで見に行こうよ」

「うん」

りおの部屋は、マンションの2階だ。道路を渡って、ゆいとはるかは、正面入り口から階段を颯爽と登る。

「あれ、玄関カギかかってない。もう、りおちゃん不用心だなあ。お邪魔しまーす」

「りーーおーーちゃん！」

部屋のドアは閉まっているが、ノックをしても出てこない。しかし、明らかに中にいる気配がする。

「りおちゃーーん、いるー？　入っていい？　入るよー」

「!?」

「りおちゃん!?」

整った白いシーツのベッドの上に、りおの、あられもない姿。

セーラー服の胸がはだけ、スカートはめくれてパンツは丸見え。足を

だらしなく開き、表情は……天に上ったかのような幸せそうな恍惚の表情を浮かべていた。

［第2話に続く］

第2話　くすぐり部屋の甘い洗礼

■前回までのあらすじ

『マンションの裏で不思議な虹の輪を見つけ、えっちルームという異空間の建物に迷い込んだりお。そこは、世界中から虹の輪を通じて女の子達が集う場所だった。フラフラと教室部屋に入り込み、女の子達とじゃれ合うりお。女の子の中の一人、せいかにスカートめくりを敢行すると、ノーパンだったせいか。お返しにせいかにエッチなことをされ、イッてしまったりお。待ち合わせ場所に来ないのを心配した、りおの親友のゆいとはるかは、りおの自室に向かった。そこには、イッた直後のあられもない姿のりおが恍惚の表情で倒れていた。』

「え、え、えっちルームーーー !?」

「何そのド直球なネーミングは？　まさにエッチなことをする場所そのものってことじゃない！」

ブレザーの制服を着たポニーテールの髪型のゆいが、りおの話を聞いて驚く。ゆいがこんなに大きな声を上げるのは、去年牧場からヒツジが三匹脱走してしまった時以来だ。

頭に赤いリボンを付けたショートカットで愛くるしい丸顔のはるかは、顔を真っ赤にして恥ずかしがりながらも、興味津々の表情だ。

「ね、ね、みんなでそこ行ってみようよ。すっごく楽しそう！」

「あたしも！　行ってみたい！」

はるかは立ち上がり、ピンクのミニスカートをひらめかせてウサギのようにジャンプする。

「あ……その前にりおちゃん、なんかパンツの真ん中のそこ……うっすら……」

「きゃっ！　もう、恥ずかしいから見ないで」

ゆいに気付かれて、りおはあわてて足を閉じ、両手でパンツを隠した。
はだけたセーラー服の上着も整え、胸を隠す。

（パンツのアソコの所に染みができてたってことは……りおちゃんきっとエッチなことされて、しかもこの表情は……すっごく楽しかったに違いない）

ゆいは頭が良く、感性も状況判断力も抜群だ。そして、エッチで、エネルギッシュで、好奇心旺盛なのは、三人共通だ。

「ねえりおちゃん、その虹の輪はどこにあるの？」

「うんとね、裏口の階段の、さらに奥のベンチの方にあったんだ。ほら、夜一番明るくなる狭い方の」

「あー、そっちの方なんだ。普段あまり行く人いないもんね」

りおはゆっくりベッドから立ち上がり、伸びをして両腕を挙げると、セーラー服も上に浮いてお腹のおへそがうっすら顔を出す。

「うーん、あふう……いやあ、なんか今日はちょっと、はは、汗もかいてるし、ぐったりしちゃったなあ。あのさ、私、今日はもう休んでてもいい？　ゆいちゃんとはるかちゃんで行ってみなよ。その場所、すごくドキドキするような独特な雰囲気でさ。二人共きっと気に入ると思うよ」

……トントントン

軽快にマンションの階段を降りるゆいとはるか。はるかのピンクのスカートがひらひらと舞い、下から覗くとすぐパンツが見えてしまいそうだ。空はオレンジが熟して潤い広がる夕日の夕方。もうすぐお腹の中のペコ太郎が騒ぎ出す時間だが、ゆいとはるかは、どうしても今日のうちにその虹の輪を見ておきたかった。そして、その先も……。

裏口から広場に抜け、角を曲がり、奥のベンチを目指すと、それはすぐに見つかった。

「わあ、ホントだ。虹の輪がある！」

「きれいだね。ドキドキしちゃう」

りおから聞いた通り、真ん中の白い霧に体を預けると、即座に体が瞬間移動した。

【えっちルーム】

「……」

「ホントに、えっちルームって書いてあるよ」

「なんか、一見普通の茶色の建物だけど……すごく古いんじゃないかな。歴史のある建物って感じ」

入口の引き戸は、木でもプラスチックでもない、見たことのない高級そうな素材だ。

開けた瞬間から、建物内の神秘の空気が、ゆいとはるかの体を包み込む。

「まあ、あなた達が、この前来たりおちゃんの友達ね。ゆいちゃんとはるかちゃんでしょ」

（うわあ、素敵！　町で見る他の女の子とは全然違う。美人のオーラ、何か不思議なオーラがある……）

（わわ、この服装見たことある！　ブルマっていうやつだ。すっごく美人のお姉さん。でもなんで、すぐあたし達の名前がわかるんだろ）

「あはは、そんな驚かなくてもいいのよ。ここは外の世界とは違う異空間だから、多少不思議なこともあるのよ」

思わず見惚れ、呆然としていたゆいとはるか。ほんの数秒の間のワープと、目の前に現れた美麗の美女に、しばし頭がフリーズしていた。

えっちルームに入り、クリーム色の絨毯の廊下の片隅。時折、ゆいとはるかと同じ年位の元気な女の子が廊下を通り過ぎ、笑いながら、顔を赤くしながら……部屋の出入りをしている。

その光景を見ながら、ゆいとはるかは目の前に現れたブルマ姿の美女に、ひととおりの説明を手短に聞いた。

この女性は、美和。このえっちルームのナビゲーターという役割で、部屋の管理を行っており、様々な魔法の力を持っているらしい。

そしてえっちルームは現実世界とは違う異空間であり、世界中に点在している虹の輪につながっていること。エッチな女の子だけが虹の輪を発見して辿り着けること。えっちルームには、「教室部屋」「電車部屋」「くすぐり部屋」「ベッド部屋」の四つの部屋があること。教室部屋では美和が特別な授業をすることもあるという。

この他に、入口のすぐ横の左右のドアの先は、着替えや休憩をするマジックミラーの準備室と、美和の業務用のナビゲーター専用室。さらに奥には……白い霧に包まれた未知の空間があり、そこは美和も足を踏み入れたことがないらしい。

「どう？　素敵な場所でしょ？　ここはただ単にエッチなことをするだけの場所じゃないのよ。その意味は、これから何回も来てみればわかるわ」

美和はウインクしてにっこり笑い、両手でゆいとはるかの肩をポンポンと叩いた。

醸し出すエッチなおおらかさ。キュッと引き締まったウエスト。ブルマに包まれたお尻、太ももは艶がある。ブルマの右上には、金色の刺繍で【Ｎａｖｉｇａｔｏｒ】と鮮やかな縫い付けが光る。

呆然としていたゆいとはるかは、美和の話を聞きながら、時には顔を赤くし、時には目を丸くして驚き、時には手で口を押さえ……次第に興味と興奮が、青空に向かう稲穂のように伸び盛っていった。

「た、た……たのしそうーーー！　ね、はるかちゃん、くすぐり部屋に

行ってみない？　きっとかわいい女の子がたくさんいて、好き放題こちょこちょ……できちゃうかもよ？」

「え……うへへ……そうだよね！　でもあたし、ちょっと恥ずかしいなあ」

「他のお部屋からでもいいよ。教室、電車、くすぐり、ベッド……四つあるんだって。はるかちゃんはどこがいい？」

ゆいは声を上ずらせながら、はるかの手を握ってブンブン振り回す。ゆいはなんといっても、無類のくすぐり好きだ。ほぼ毎日のように、りおとはるかの腋や股をくすぐり、反撃されてくすぐられて笑い転げ、そのままもっとエッチなことも……。

はるかは、ゆいの手を握り返しながら、顔を赤くし、モジモジ……照れながらもぎゅっと自分の股に手を当てがい、モジモジしながら……。

「あ、あのさ……先にゆいちゃんお部屋に入ってみて、あたしそこがど



んなだったかゆいちゃんに聞いてから二人で行きたい……。その……恥ずかしいからさ」

「うん、いいよ。じゃあわたしくすぐり部屋に行ってみる！　はるかちゃんはゆっくり待ってて」

はるかは美和に案内され、入り口横のマジックミラー準備室で待機することになった。廊下をまっすぐ進み、右側の二番目のドアへ、ゆいは新しいオモチャを手に入れた幼児のような足取りで駆け出していく。

「きゃあああああーーーーはははははははははあはははははっっきゃああ
あ～～～～！」

「あああああんんーーーきゃあはははああーーーくすぐったいよお～
～～！」

性のエキスを体中から解き放つような、カン高い笑い声が、部屋中に充満している。その部屋に入った瞬間から、ゆいの心臓から循環する血液は沸騰し、興奮と共に毛穴から汗が滲み始めた。

ズラリと並べられた拘束台。立って大の字に張り付けられ、くすぐられる制服の女の子。ベッドに両手両足を拘束され、スカートがめくれてパンツ丸見えのまま、全身をくすぐられる女の子。病院にあるような台の上で、下半身丸出しで足を開き、大切な秘部を数人がかりでくすぐられる女の子……。

「ほおらーーー、こちょこちょこちょこちょ」

「腋もっとしてほしい？　ほらくすぐったいでしょ～～コチョコチョコチョコチョ……」

「あははあああんっあああああーーーーーきゃあああひいい～～～～ちょっとそこはあああああ～～！」

「きゃはははあはははあああああひいいいい～～～～～～うひゃあああはははははは～～～～！」

ごくり……。

（わたしが望んでた……くすぐりが凝縮されている部屋！）

ゆいは思わず立ちつくし、生唾を飲み込んだ。

ゆいはくすぐりが好きなのと同時に、くすぐられるのが弱い。りおとはるかよりも、かなり弱い。少し腋をさわさわされるだけで、その端正な顔立ちがあっという間に崩れ去り、ヨダレを垂らして笑い転げてしま

うことを、ゆいは自分でもよく自覚していた。

そこら中の拘束台で、女の子が狂乱の笑顔で柔肌をよじらせている。みんな、幸福の渦に身を任せて全身を解放しているかのようだ。ゆいはそうっと忍び足で歩き、一番近くの拘束台でくすぐられている女の子の元に近づいた。

立った状態で大の字になり、大口を開けて笑い乱れる女の子。水色のミニスカートはもう半分めくれ上がって、白いパンツが下から姿を現そうとしている。そして背後に、両手を妖しくうごめかせる女の子。

「ほらほら、もうパンツ見えちゃいそうだよー。こちょこちょこちょーーー！」

「きゃあああんんえっちぃぃぃーーーー！　もっとコチョコチョしてええええええーーーーあはははははあはあああああ！」

ゆいが吸い寄せられるように近づくと、背後の女の子が気付いた。

「ゆいちゃん、初めてここに来るのね。その顔は、くすぐりが大好きでしょ？」

「……う、あ、はは……」

「遠慮しなくていいよ。やってみたいでしょ。ほら、おいで」

その子はいたずらっぽく笑い、拘束台から離れ、ゆいの手を取った。スカートがめくれ上がったまま笑い顔で固まっている女の子の後ろに、自分が立っていた場所を指さしている。

（腋が、丸出しだ……。しかもこの子の体、いい香りがする。汗と、女の子特有の、鼻に通ってくるような生々しい感じ……）

ゆいの鼓動は、光速でボールを投げ合うかのように、さらに早くなる。指先にも汗が光り、下半身にピンク色の湿り気が充満するような予兆がする。

「ねえ、ゆいちゃん……腋の窪みの所……」

「……こちょこちょこちょ」

「‼きゃはあああああーーーーー！　く、くちゅぐったあああああああぎゃはははははーーーー！」

……ぴくん！……ぴくん！……女の子は、動けない手足をヒクつかせ、スピーカーが壊れるほどの歓喜の声を上げた。

「あはは、ゆいちゃんすっごくくすぐるの上手！　指先が天使の帯みたいだね、素敵！」

背後でくすぐる役だった女の子は大喜び。くすぐられた女の子は笑い顔で固まったままヨダレを垂らしている。

「……嬉しい！　こんなに、こんなに楽しいのって、最高！」

ゆいは笑顔を輝かせ、気分は更に高揚した。胸の高鳴りは、麓の虹が空に羽ばたくようにどこまでも高鳴っていきそうだ……。

（くすぐり、エッチなこと……もっと、もっとしたい！）

……ぎゅっ

「あ、美和ちゃん？……」

ブルマからすらりと伸びる生足の、温かい感触。背後から抱きしめられ、首筋と頬を撫でるような大人の色香が、ゆいを背後から抱きしめ…

…逃げ場なく包み込んでいる。

「ゆいちゃん……くすぐりが好きなのね。そのブレザーの制服も、似合ってかわいいわよ」

「え、えへへ……」

美和の甘い吐息が顔にかかる。あたたかい手のひらがゆいの制服の上からお腹を包み込み、美和の柔らかい胸がゆいの背中に押し当たる。

ゆいは思わず息を飲み、ぞわりと首筋の毛が逆立った。

「ゆいちゃん、濡れてるでしょ？」

「…… !! 」

美和は笑って、ゆいの横胸をちょんちょんとつつくと、両手首を掴み、すぐ横の空いている拘束台に向かった。

――カシャカシャ――カシャカシャ――ぴたっ――

「え、え？　美和ちゃん、その、わたし……」

「ゆいちゃん、動けないでしょ。どきどきする？」

気が付くとゆいはブレザーの上着も脱がされ、上はYシャツとネクタイだけ。下に履いている黒の清楚なプリーツスカートは、無防備にいつでもめくれ上がろうとしている。

動けないゆいの眼前で、美和は両手の指を妖しく動かしながら近づく。

そのブルマの美女はまるで、性の導かれし王女のようだ。

（くすぐられる……くすぐられたい……わたし、くすぐられる……くすぐられたい……）

「……こちょこちょこちょ……」

――――――!!

「きゃーーーーーーあああはははははあああ……あああはははははははははは

ははは――――――!」

「こちょこちょこちょこちょこちょこちょこちょ、コチョコチョコチョコチョコチョコチョコチョコチョ

コチョコチョコチョ――」

「きゃあああああひいい～～～～ぎゃ はははははっあああああああ

ああ～～～～～～～ぎゃ はははははっあああああ～～～～～～～～

うひゃひゃひゃあひゃひゃあぁぁあああああああ～～～～～ !!」

……こちょこちょこちょこちょ……こちょこちょこちょこちょ……こ

ちょこちょこちょこちょ……

（な、な……なにこの刺激！　りおちゃんやはるかちゃんにされるのと全然違う！　美和ちゃんの指が……わたしの体……這い回ってる……体中電気が走るみたいに、くすぐったい……くすぐったい……笑いが止まらない……）

「ゆいちゃんいい顔ねー。端正なお顔がだらしなくなっちゃって、ヨダレも出てるわよ。ほら、もっとおかしくなるまで笑い狂っちゃいなさい。うふふふ……こちょこちょこちょこちょ！……」

「きゃあああああーーーーはははははははあはははははっっきゃあああああ～～～～！」

「コチョコチョコチョコチョコチョコチョ……」

「あきゃきゃきゃきゃはははははあああ～～～ああ～～～～あ～～～～あきゃきゃきゃぎゃはははははははくすぐったいくすぐったいくすぐったいいいいいーーーーーあーーーーーぎゃはははあああああああああああ～～～～～～～～～～～～ !!」

ゆいは髪を振り乱し、ヨダレを垂らし、貪るようにひたすら笑い転げた。一番敏感な腋、そして脇腹、おっぱいの横、腰骨……Yシャツとスカートの布地を貫通して、甘美な刺激が体の中に入ってくる。ゆいの全身の細胞は、血流が活発に流れ、体温が上昇し、喜びと幸福に満ちていた。

「ゆいちゃん、三十分位こちょこちょしようねーーー」

「あぎゃーーーーはははははあああえええええーーーーー？　さんじゅっっぷーーーんーー　!?　――――しょんんああなあああガマンできなあいいいいーーーーーあひゃあああああ～～～～あああああはははははははははうひゃひゃひゃあひゃひゃひゃあぁぁあああああああああああああ～～～～～……」

……。

……。

三十分後。ゆいのマンションの自宅、白いベッドのマットレスが、虹の光と共に跳ねてきしむ。

ぐしゃぐしゃに乱れたポニーテールの髪と、びっしょり濡れたパンツ……顔は絶頂後の笑顔のまま、ゆいは幸せそうに布団の中でスヤスヤと眠りについた……。

［第3話に続く］

キャラクター紹介



りお

マロン色のロングヘアで、
スタイル良しの美人。明るく、
勇気があって仲間思い。いつも
エッチなことに興味津々。



ゆい

ポニーテールがトレードマークの、
落ち着いた佇まい。頭脳明晰の
読書家。くすぐりが大好きだが、
くすぐられるのも弱い。



はるか

りおとゆいよりも年下。
リボン付きのショートカットで、
パンツはいつも白。三人の中で
一番エッチだが恥ずかしがり屋。



美和

えっちルームのナビゲーター。
ブルマ姿で様々な魔法を使いこなす。

第3話　「はるかちゃん、純真無垢ね」

■前回までのあらすじ

『りおが発見したえっちルームの話を聞いたゆいとはるかは、二人で初めてえっちルームを訪れた。そこで、えっちルームの管理者であり、ナビゲーターの美和と出会う。えっちルームの説明を聞いた二人、ゆいはくすぐり部屋に行き、はるかは別部屋で待つことに。ゆいが女の子をくすぐって遊んでいた所に美和が現れ、くすぐられたゆいは笑い転げて絶頂に達してしまった。』

「ゆいちゃん遅いなぁ……」

ゆいは一向に戻ってこない。マジックミラー準備室の、大きく細長いソファーで、はるかは足を体育座りのように上げたり、閉じたり開いた

りしていた。後ろにかかっている鳥型の壁時計の長針は、もう真上から真下まで移動している。

真後ろには、十人は座れそうな大きなダイニングテーブルとキッチン、そしてウォーターサーバーがある。

――「誰でも自由に使っていいのよ。ちゃんと水分補給してね」――

美和の言葉を思い出し、はるかは食器棚を開けた。家にある自分のマグカップとよく似た、花の模様が付いたピンク色のマグカップがある。はるかはそれを取り出し、ウォーターサーバーの水をめいいっぱい入れると、一気に飲み干した。

まだ、ゆいは戻ってこない。ソワソワして落ち着かない。

（このえっちルームって、どんなことする場所なんだろう。だって、名前が……えっちって……あーもうドキドキしちゃう！）

頭の中がこんがらがり、はるかは、性力全開の体が胸の奥から疼いてくるのを感じた。

はるかは、自分でも充分自覚していた。りおに手を握られ、ゆいに背中をさわさわされ、スカートをめくられてパンツを見られると……。

「あうーー……」

（また変なこと考えちゃう……！）

一人で意味不明な発音をしながらじたばたしていると、美和が戻ってきた。背筋をぴんと伸ばして晴れやかな笑顔だ。

「はるかちゃんお待たせ」

美和の澄んだ春空のような香りが、はるかの耳元をかすめる。

「あ、あの、ゆいちゃんは？」

「大丈夫よ。私が魔法で自宅まで送り届けてあげたから」

美和はにっこり笑い、右手の人差し指にフワリとピンク色の霧のよう

なオーラを見せた。ピシピシと炭酸のジュースが弾けるような音がする。

「わ！　これって」

「魔法の光よ。そのうちはるかちゃん達にも見せる機会があるかもね」

「こんなの、初めて見た……」

「外の世界じゃ、まず見る機会はないと思うよ。見たところ、はるかちゃんは三人の中でも一番若いのね」

「うん。りおちゃんが一番年上で、ゆいちゃんが真ん中なんだ」

「それなら、ここは楽しいことをたくさん知る良い場所になるはずよ。はるかちゃんも、エッチなことには興味あるでしょ」

「う……はは……恥ずかしい」

はるかは顔を真っ赤にして下を向き、足をモジモジさせる。ピンクのミニスカートから伸びる両膝が、コチンコチンと摩擦音をあげた。

「ところではるかちゃん、かわいい白パンツ履いてるのね」

「え……見てたの !?」

はるかの顔がさらにスイカのように真っ赤になる。

「だってここは、マジックミラー準備室よ。マジックミラーだから、外から見えるんだから。体育座りで足開いてたから丸見えだったわよ」

「ま、丸見えーー？　もう！　あたし今までパンツ……りおちゃんとゆいちゃんにしか見られたことないのにーーー！　恥ずかしいーーー！」

「うふふ、はるかちゃん白パンツ」

「もおーやめてよお！　恥ずかしい！」

はるかはほっぺたを膨らませ、前に立っている美和の腕をグイグイ揺らす。すると美和はソファーのはるかの横に座り……はるかの右手をそっと取った。

ぎゅっ……

（あわわわ……手、にぎられちゃった！　ううう、ドキドキする……でも、

あったかい）

ショートカットの前髪の隙間から、汗がつるりと一筋……。

「ね、はるかちゃん、今日は私が部屋を一つずつ案内して一緒に回ってあげるから、それで見学していったらどう？　このえっちルームのことがよくわかるわよ」

「うん、それなら……それだったらいいかな。恥ずかしくなさそうだし……けどさ」

「けど？」

「ゆいちゃんは……さっき、お部屋でどんなことしてたの？」

美和は純真無垢なはるかの目を見つめ、少しだけ意地悪そうなオーラを発してささやいた。

「それは、後で本人に聞いてみなさいよ。ゆいちゃん、すっごく楽しそうにしてたわよ」

（……楽しそうに……）

はるかは、先ほどりおが自室で大の字パンツ丸出しで倒れていた様子を思い出した。

りお、ゆい、はるかは、時々お互いの部屋を行き来して、一緒に夜ご飯を食べたりする。その後……触り合い、くすぐり合い……。そんな時……時々、はるかは見ていた。

――「ねえゆいちゃん、ほら、パンツの中、ここ気持ちいいんでしょ？」

――

――「もお～！　ホントりおちゃんエッチなんだから～あ……あん……ちょっと……わたしイッちゃうって……！」――

――ビクンッ……ビクンッ！……ぴく……ぴく……――

（あの、大の字で倒れてたりおちゃんのアレって、ゆいちゃんにお股さわられて、すっっごく気持ちよくて、体の中に花火が打ちあがるような

……絶対アレの後だよね……？　あああ～～～絶対そうだ！）

（ということは……美和ちゃんが言う、ゆいちゃんが『すっごく楽しそうに』って……。あわわわわ……）

「あはは、はるかちゃん、何目玉ぐるぐるさせてるのよ。あなたとってもわかりやすいのね。面白いわ」

美和ははるかの顔を見て大笑いしている。そして、はるかの手を引いて立ち上がった。

「ほら、行きましょ」

はるかの右手には、うっすらと手汗。

……どきん……どきん……どきん……

美和の手の平から、はるかの心臓に、あたたかい力が送り込まれている。

「わぁー、また新しい子だー」

「はるかちゃんっていうんだ。ちっちゃくて可愛い～」

教室部屋に入ると、数人の女の子が寄ってきた。黒やベージュや青、制服っぽい恰好の子が多い。健康そうな生足が目立ち、すぐパンツが見えそうなほど、みんなスカートが短い。

（本当に学校の教室みたい。たくさん女の子がいて、広いお部屋……。牧場の横の公園に咲いてるお花みたいないい匂い……）

（みんなかわいいな。あたしよりもお姉さん位の人も多いし。わ、あの子スタイルすっごくいい！　あの子は……胸のボタンが……見えるかな……。どんなパンツ履いてるんだろ……あ、あの子……もう少しで見えそう）

（！……いけないいけない、またエッチなこと考えちゃった！）

「はるかちゃん」

「うえ？」

「なーにニヤニヤしてるの？　どんなパンツ履いてるのかなあなんて

考えてたんじゃない？」

美和の甘くて鋭い声が……。

「そ、そんなこと考えてないもん！」

はるかは横を向いて、ほっぺたを膨らませる。

「じゃあ、見せてあげる」

バサッ！

「きゃあぁぁ！　もう美和ちゃん、エッチ！」

美和の俊敏な動き。はるかに興味を持って目の前に近づいていた、青いスカートの女の子の下半身が、はるかの目の前にさらけ出された。

（あ、あ！　美和ちゃんがスカートめくり……ぱ、ぱんつ見ちゃった！あたしと同じ白のパンツ、リボンが付いてて……あわわわ）

「あはは、はるかちゃんって、すっごくウブなんだね。そんな顔赤くして目を背けちゃってさ」

「え、あ、うえっ……ああ、ははは」

ドギマギしていると、スカートをめくられた女の子が寄ってくる。

「今度はさ、わたしがはるかちゃんにスカートめくりしてあげよっか？」

「あ、あたしはいいの！　恥ずかしいもん」

はるかは下半身を手で押さえ、無意識に腰が引けてしまう。重心が下がり、後ろでニコニコ笑っていた美和にボフンとお尻をぶつけてしまった。

「うふふ、はるかちゃんのパンツはまた楽しみに取っておこうかしらね」

（さっきの教室と違って、ここはすごく静かだ……。でも……さっき以上に、なんかドキドキしちゃう良い匂いがして、すごく、エッチな雰囲気が……）

本物の電車そっくりの室内、数十本のつり革、長い紺色の椅子、ガタンゴトンと軽く揺れながら草原を写す窓。美和は「特殊な魔法を使った

作り物」と説明してくれたが、まるで本物そっくりだ。

……すりゅ……すりゅ……すりすり……くしゅくしゅ……

「あ……ん……っ……ん……あ……」

はるかは……じっと魅入っていた。

大人びたワンピースの女の子が、小柄なセーラー服の女の子のスカー



トの中に手を入れている。モゾモゾと右手を動かしている所を、はるかはしゃがんで、間近五十センチの所で凝視していた。

（すっごくドキドキする……りおちゃんとゆいちゃん以外の女の子がお股触られてるの、初めて見ちゃった。指がパンツの上でクニクニ動いて、エッチ過ぎる……どんな感じなんだろ）

（自分で足開いて……わ……なんか太ももの肌も毛穴も、ヒクヒクして……！　あ……パンツが……あ、あ！）

（いけない……これ、こんなの見てたら……また、オナニーしたくなってきちゃう！……もっと、もっと見たいけど……早く出よう……出なきゃ）

はるかは立ち上がり、目を伏せがちにして、そそくさと電車部屋から出た。廊下では、美和がニコニコしながら待っている。

「あら、もういいの？　もっとたくさんいてもいいのよ？」

「あ、え、えへへ……うん」

はるかの目は泳ぎ、おでこにはうっすら汗が光る。

――ごきゅっ――

はるかの生唾を飲む音が、美和の耳元に届いた。それを聞く前から、美和はくすぐり部屋入り口横の棚に手を伸ばし、小さなパックドリンクを取り出した。ひょうたんのような形のオレンジとマンゴーのデザインが描かれている。

「ほらはるかちゃん、これ飲みなよ」

「あ、ありがと」

世界中の光と愛情を浴びて熟した果実の甘みが、はるかの喉をつたい、全身の細胞に送り込まれる。乳飲み子のようにストローを咥えながら、はるかはえっちルームの廊下の景色を見渡した。

向こう側に、あと二つ大きなドア。壁は見たところ人工的なもののよ

うだが、自然の木の匂いがする。その壁から所々、黄色や水色や、虹のような多色……見惚れるほどきれいな花が咲いている。

（見れば見るほど、不思議な場所だ……。壁も、マンションや市街地のお店とかと全然違うし。なんだろ……ここにいるだけで、心地良くてドキドキしちゃうっていうか……。でも、なんか落ち着けてホッとできる感じもする）

はるかがジュースを飲み終わると、美和が聞いてきた。

「ねえ、はるかちゃんは、くすぐられたことある？　こちょこちょ」

「うん、あるよ。特にゆいちゃんがすごくこちょこちょ好きで、あたしょっちゅうくすぐられちゃうんだ。あたしもやり返しちゃうけどね」

「まあ、楽しそうね。でも、次の部屋はたぶん、はるかちゃんには刺激が強すぎるかもよ」

「えっ……？」

はるかは美和に手を引かれ、えっちルームの廊下を横断して歩く。近づく高級そうな引き戸。その横には、端正な文字で「くすぐり部屋」と書かれている。

はるかはギュッと美和の手を握りしめ、耳をそばだてながら、そっと顔をドアに近づけ……。

「きゃはあああーーーあきゃひゃひゃあああーーーもっとおおおーーーー!……」

「ぎゃはははああああひいぃぃぃやあああーーーあははひゃはああんんああーーーー!……」

「おまんこぉぉくちゅぐったあああいいいい~~ぎゃひいいいあひゃあああーーーー!……」

(!……)

(こ、この声……)

はるかは体の内側から燃えるように、体が熱くなってきた。普段恥ずかしがって『隠れている』気持ちが、メラメラと燃え盛って今にも外に出てきそうだ。

「あ、あの、美和ちゃん……なんかあたし、この部屋に入ったら……びっくりして気絶しちゃうかも……」

「ふふ、そうかもね。じゃあ最後のベッド部屋だけ見たら帰りましょうかね」

二人はくすぐり部屋に背を向けて、最後のドアに向かった。

（……やっぱり見たいような、見たくないような……ゆいちゃんさっき、あの部屋でたくさんくすぐられたのかな……）

「さあ、ここがベッド部屋よ」

四つある部屋の最後の部屋に、美和とはるかは入った。中には誰もい

ない。

大きなベッドが二つ。横にはソファーと木目調のテーブルが二つずつ。大きなスタンドライトが二つ。蝋燭も付いていて明るい。水色の波の模様のカーテンが静けさを醸し出す。

「ここは騒がしくないから落ち着けるでしょ。他の部屋と違って、ここは光が注ぐ真空間の天井ではなくて、人口の天井なのよ」

「ホントだ。普通のおうちのお部屋みたいな感じ」

はるかはキョロキョロしながら室内を歩き回り、スタンドライトや蝋燭に顔を近づけては、物珍しそうにじっと見入る。まるで社会科見学に来ている学生のようだ。そんなはるかを、美和はニコニコしながら見守り、愛情たっぷりの目で見つめる。そして、一回りしたはるかに、距離を寄せて近づいた。

「ねえ、はるかちゃん」

美和ははるかの正面に立ち……再び優しくはるかの両手を握る。美和の憂いある瞳と声に、はるかの心臓は再び高鳴り始めた。

「あなた、いつもエッチなこと考えてるでしょ」

「!! ……そ、そんなことないもん!」

「うふふ、隠しても無駄よ。あの子のおっぱい触りたいなあとか、あの子のオマンコ見たいなあとか、そんなことばっかり考えてるでしょ。家ではオナニーもしてるよね?」

「も、も、もう!……美和ちゃんのえっち!」

「あら、もちろん私はエッチだけどさ。でも、りおちゃんとゆいちゃんと比べたら、潜在的なエッチの強さは、はるかちゃんが一番大きいわよ」

「!! ……えぇ~~~ !?」

美和はさらに甘い声で、はるかの全身を舐めるように見つめながら言った。

「はるかちゃん、自分でスカートめくって、私にパンツ見せてごらん」

「え、えええぇ～～！　そんな恥ずかしいことできないよお」

はるかは両手でスカートを押さえ、額からは汗を垂らしながら……パンツの奥からは、じわじわと止めようのない快感が軍勢のように忍び寄っていた。

「……はるかちゃん、かわいい」

ぴらっ！

「きゃあああ～～～！」

美和の手で、はるかのピンクのミニスカートがめくり上げられた。地味で、真っ白で、小さなピンクのリボンが付いているパンツが丸見えになる。

（パンツ見られた！　美和ちゃんにパンツ見られたーーー !!　……恥ずかしい！　恥ずかしすぎる！……）

余裕たっぷりの笑顔。ブルマ姿で堂々と立っている美和。

はるかを存在丸ごと愛で包み込み、撫でくるんでいる。

（美和ちゃん、ニコニコして見られてると……全身ドキドキしてきちゃう……。オナニーした時みたいに、体が熱い……お股も、なんか……あ、パンツが……）

また一歩、美和ははるかの前に進み出る。満面の笑み、慈しむようにはるかの頭を撫でた。

「み、み、みわちゃん……あたし、そんな見つめられたら、体が……」

「からだが？」

「ド、ドキドキしちゃうよおー」

……スリスリスリ……

（み、美和ちゃんの手……あったかい……けど、なんかエッチで……あ……パンツがもう、こんな濡れ……）

「はるかちゃん、純真無垢ね」

バサッ！

「きゃあああああ～～～！　あああ～～～！……ああ～あんんあ !!

……っあ……… !!」

……ピクッ……ピクッ……

はるかは、ばったりと後ろ向きにベッドに倒れ込んだ。強烈な快感と恥ずかしさで、体が絶頂感を大ジャンプで超えてしまって固まっている。スカートはめくれ上がり、美和の指が触れてもいない白のパンツの中心部は、はるかの秘部から染み出した愛液でびっしょり濡れている。

静かに、明るい蝋燭が照らすベッド部屋。美和はひと呼吸すると、ベッドを満足気に眺め、はるかの髪を愛おしそうに優しく撫でた。

［第４話へ続く］



【注意事項】

・本作は 18 歳未満の方の閲覧・購入を固く禁止します。

・登場するキャラクターは全て 18 歳以上です。

・物語はフィクションであり、実在の人物や団体等とは一切関係ありません。

【制作手法・著作権について】

・本作の表紙および挿絵の作成には、画像生成 AI を使用しております。

・特定のクリエイターの画風や、実在の人物を模倣する意図はありません。

・挿絵の性的描写箇所には、国内ガイドラインに沿った修正処理を行っております。

・本作の無断転載、複製、無断使用（AI への学習利用含む）を固く禁じます。

©2026 Shizuku Haruno